

北関東の山無し県 茨城のクライマー集団の会報

# R&V 35号

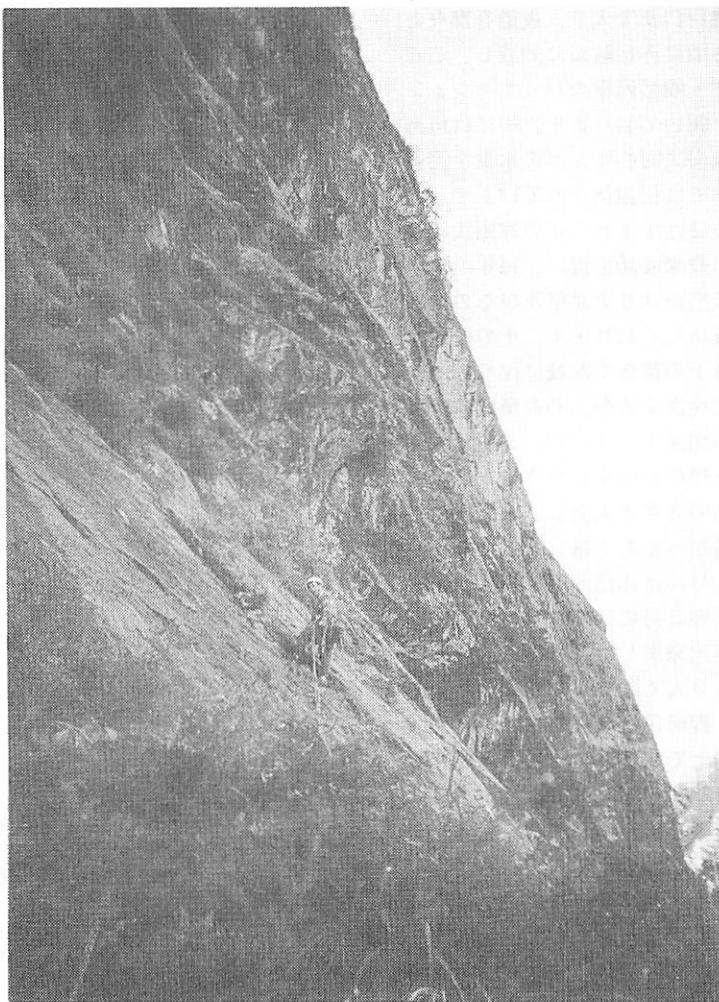
1999年10月～12月



ACC-J茨城

日指せヒマラヤ!!

Rock and valley 99' 秋 No35



奥鐘西壁中央ルンゼ 《Photo by, MOTOZU》

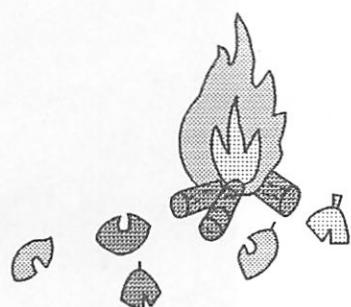
雪、岩、沢に青春をかけた若人の記録集  
アルパイン・クライミング・クラブ・オブ・ジャパン・茨城

# ACC-J茨城の足跡

ACC-J茨城が1973年にACC-Jの茨城支部として創立してから今年で27年目を迎えた。1962年に水島・神田・谷川の3氏が中心になり、東京仙岳会から独立してACC-J（アルパイン・クライミング・クラブ・オブ・ジャパン）を創立し、会の目標を冬山及び冬期岩壁登攀を高らかに掲げて歩き始めました。当時は冬期の八ヶ岳赤岳西壁・横岳西壁の登攀は1泊2日が常識であったが、ACC-Jは夜行日帰り山行を実践しました。現在と違い夜行列車を茅野で降りてタクシーで美濃戸口まで入り、夜道を黙々と歩き東の空が明るくなる頃に赤岳鉱泉に到着し、ここで小休止をして赤岳西壁・横岳西壁のバリエーションルートを登りまくったと聞いております。中には毎週々八ヶ岳に通い、横岳西面大同心ルンゼの氷嚢を完登した話はACC-Jの中では伝説化されています。着実に実力を付けてきた会員は1966年の神田氏によるマッターホルン北壁の登攀成功を機に、毎年のようにヨーロッパアルプスに出かけ6大北壁及びその他のビッグルートの登攀に成功しております。その時の精銳メンバー本団氏が一身上の都合で茨城に戻り、山への想いを断ち切り家業に専念するが、心の奥底に沸々と沸き上力いを消す事が出来ず、ACC-Jの茨城支部を創立し会員の募集を呼びかけました。第一期会員として木村・成田・遠藤の3名が入会し、本団氏の厳しい指導の下（今より若かったので厳しかったよ～）着実に成長し、翌年の1月には赤岳西壁・横岳西壁を登れるまでになり、更に翌2月には中央アルプス宝剣岳の中央稜をも登る事が出来ました。当時は会員もなかなか増えず集会も2~3人で開いておりました。その後、菊地氏・中島氏・鯉河氏と会員も徐々に増え、ACC-J茨城の会員同士で北穂高岳滝谷の冬期登攀や、谷川岳一ノ倉沢の冬期登攀する者も現れるようになりました。更に活動の場を求めて必然的に海外の山へ日が向けられるようになり、1976年に本団氏が隊長でヒンズーラジ（パキスタン）のプラッショース（6191m）に遠征隊を送り出しました。圧倒的な岩壁に囲まれたプラッショースに意を決して挑んだが、登山活動中にベースキャンプが氷河下に発生した自然湖の決壊によって流出するというアクシデントに遭遇しながら登頂を目指しました。しかし力及ばずやむなく敗退しましたがプラッショースは現在でも未登と聞いております。その後、会員の出入りはありましたが、本団氏のリーダーシップの下、当会の足跡も北は利尻岳、南は西表島までと広く、活動スタイルも冬の岩壁登攀、

雪稜、氷壁登攀、沢登り、山スキー、ヤブ山登り等幅広く、またACC-J茨城創立以来の冬の岩壁登攀活動は代々のチーフリーダーに受け継がれています。ヨーロッパアルプスの岩壁登攀に挑む会員、ヒマラヤの偵察を兼ねてトレッキングに向かう会員等、海外の山を経験した会員は多数。国内においても冬期、冬期一ノ倉沢の登攀や、本団氏による剣沢大滝の完登、赤谷川ドウドウセンの完登等、バリエーション中心の活動を継続しております。ACC-J茨城創立以来数々のアクシデントに遭遇しましたが幸いにも現在まで死者を出す事なく過ごせたことは幸せな事であると思います。当会は年間数回の訓練山行（岩登り訓練・雪上訓練・ビーコン捜索訓練・遭難救助訓練）を実践して会員の技術向上を図り、遭難防止に努力しております。会員の平均年齢も高くなりましたが、ACC-J茨城の中にも若い力が伸びつつあり、3年後には当会も創立30周年を迎える事になりますが、節目の年に海外登山隊を出す事ができれば、幸甚と考えております。

（木村 一）



## 《目次》

1999年 秋号 10~12月 ACC-J茨城

---

ACC-J茨城の足跡	1
集会報告	3
山行報告	4
三ツ峠岩登り訓練	5
北岳バットレス4尾根主稜	6
奥鐘山西壁中央ルンゼ	8
松木沢ジャンダルム・岩トレ	10
黒伏山・中央ルンゼ	10
谷川岳・一ノ倉沢中央カンテ・冬期登攀偵察	11
巻機山・米子沢	13
西上州・鹿岳&荒船山	15
谷川岳・一ノ倉沢南稜・冬期登攀偵察	17
表妙義山縦走	18
丹沢・女郎小屋沢	18
ピーコン搜索訓練	20
房総・キンダン川&伊予ヶ岳	21
八ヶ岳大同心稜	23
友好山岳団体の月報・会報・その他	25
編集後記	27

---

\*硫黄岳から赤岳を望む

《Photo by K. Motozui》

## 集会報告

(於、スカイラークガーデン)

### 【 10月 】

10月13日

出席者 本団、木村、菊地、渡辺、吉田

10月27日

出席者 本団、木村、菊地、古山、吉田

### 【 11月 】

11月10日

出席者 本団、古山、木村、菊地、生井、笹平、吉田

11月24日

出席者 本団、木村、菊地、鯉河、渡辺、笹平

### 【 12月 】

12月 8日

出席者 本団、木村、菊地、生井、笹平、吉田

12月21日

出席者 本団、木村、菊地、生井、吉田、渡辺

## 山行報告

《 1999年10月～12月 》

### 【 10月 】

10月 3日	三ツ峠	L本岡、木村、生井、吉田、渡辺
10月10～11日	北岳・バットレス四尾根	L笹平、吉田、渡辺
10月 9～11日	奥鐘山西壁	L本岡、吉山
10月 17日	足尾松木沢ジャンダルム	L本岡、吉山、生井、渡辺、吉田
10月 24日	黒伏山・中央ルンゼ	L吉山、生井、笹平、吉田、渡辺

### 【 11月 】

11月 7日	谷川岳・一の倉沢中央カンテ	L吉山、生井、笹平
11月 7日	巻機山・米子沢	L本岡、高木、吉田、渡辺
11月 14日	西上州・荒船山	L本岡、吉田、渡辺
11月 14日	谷川岳・一の倉沢南稜	L吉山、生井、笹平
11月 23日	妙義山	L吉山、生井、渡辺
11月 28日	西丹沢・女郎小屋沢	L本岡、吉田、渡辺

### 【 12月 】

12月 5日	谷川岳・ビーコン訓練	L本岡、木村、菊地、笹平、吉田、渡辺
12月11～12日	谷川岳・一の倉沢南稜	L吉山、生井、笹平
12月 12日	房総・キンダン川	L本岡、吉田
12月 19日	富士山・雪上訓練	L本岡、木村、生井、笹平、吉田、渡辺
12月 23日	八ヶ岳・大同心稜	L本岡、生井、吉田、渡辺

## 三ツ峠岩登り訓練

1999. 10. 3

パーティ し本団一統、生井一男、吉田仁、渡辺聰子、木村一

空を見ると雲の流れが速く、昨晩の風が上空に残っている様子だ。昨晩遅く到着しテント設営中に雨粒が落ち始め明日の岩登りは半ば諦めかけていたが、なんとか登れそうである。しかし、ザックの中にはキノコ採り用のビニール袋はしっかりと忍び込ませておきました。モミ林の中に伸びる登山道を登りながら目でキノコを探すが、しかし林の中に入らなければ目当てのキノコを見つける事は難しい。約1時間の登りで山頂手前の山小屋に到着。ここで遅れ気味の生井氏を待つがなかなか現れない。そのうち三ツ峠岩場の下で聞き覚えのある声で『本団さ～～ん』と呼ぶ声が聞こえるではないか。身支度をして急いで生井氏の所に下り合流したが、三ツ峠初体験の生井氏は山小屋の前を通らないで行ってしまったみたいだ。早速、本団・吉田・渡辺パーティと木村・生井パーティに分かれて、本団パーティは観音ルートを、我々は草溝ルートを登る事にした。トップで登る生井氏は年齢を考えずリーダーピッチを登り始めてしまったので、

『オーケイ俺の年を考えてくれヨー』

と叫ぶが知らん顔でザイルを伸ばして行ってしまった。暫くして『OK』のコールがあり、残置をクリーニングしながら草溝ルートを登るが上部のクラックを登る所が面白い。第一バンドに這い上がり観音ルートを見ると本団氏が後続を確保中、程なく

『キヤー落ちた～』

と大きな叫び。これを予測していたごとく顔色一つ変えずこれを確保。さすが本団さん。我々は第一クラックに取り付いたがクラックに入る手前の一步がツルツルで面白い。更に第三バンドに這い上がり、権兵衛チムニーの取り付きに向かったが先行パーティがあり、順番待ちである。第三バンドに腰を下ろし大休止を決め込むが、程なく本団パーティが登ってきました。小休止後本団パーティが先行して権兵衛チムニーに取り付きましたが、先行パーティが難儀している様子である。権兵衛チムニーは中間で体の向きを変えるのがポイントであるが、吉田君・渡辺嬢は難なくここを登っているので、我々も恥ずかしい姿は見せられない。久し振りに登った権兵衛チムニーはなかなか面白いルートである。上部の天狗の踊り場に出て、トップロープで三ツ峠名物の大根おろしのバランスクライミングを楽しんだ後、三ツ峠の山頂へ登った事がない生井氏と一緒に山頂にを目指した。山頂にはハイカーが数人昼食を楽しんでいて、ヘルメットを被り、ザイルを背負っ

た我々は場違いの感じがしたので、早々に山頂を後に岩場の基部に戻ったが、本団パーティは第二バンドからの懸垂下降中であった。合流後更に一般ルートで練習する事にしたが、ここは期待の新入会員吉田君・渡辺嬢にトップで登る練習をして頂くことにした。下から見守る本団氏のアドバイスを受けて両名ともリードして一般ルートを登りきったので、今日1日の訓練成果は充分にあった様子だ。ボソボソと空から雨粒が落ちてきたので、登攀用具をザックに手早くしまい下山の途に着いた。今日は山から手ぶらで帰ると家で厳しいお仕置きが待っているので、早々にモミ林の中に入りキノコ狩りに熱中。アカモミタケ、キハツタケ、カノシタ等の食用キノコが沢山取れたので一安心。ただ心残りはカラマツ林に生えるハナイグチが取れなかったのが残念。帰路の車中はキノコ談議に花が咲き、帰宅後、アカモミタケ、キハツタケは炊き込みご飯に、カノシタは吸い物にして食したが美味でした。岩登り＆キノコ狩りが楽しめる三ツ峠は訪れるのが楽しい。

(木村 記)

# 北岳バットレス4尾根主稜

1999. 10. 10~11

パーティ L 笹平孝、吉田仁、渡辺聰子

体育の日の連休に『どこに行きたい?』と聞かれたので『北岳バットレス!!』と即答し、希望通り4尾根に行くことになった。

9日の夜につくば市役所に集合し出発。谷田部インターから常磐道～首都高～中央道と乗り継いで、広河原に到着した時は1時を回っていた。あんなに広い駐車場なのに満杯で道路にも車があふれていた。かなり奥のほう(北沢峠のほう)によくやくスペースを見つけ駐車し速攻でテントを張って就寝。空は明日の晴天を約束してくれるような満天の星だった。

朝4時に目を覚まし外に出てみるとすっごく寒い。出発した5時半ごろ回りはかすかに明るくなってきていたがヘッドランプをつけて登山道を歩き出した。しばらく歩くと二股に到着。進路を右にとり御池小屋へと向かう。何組かの下山てくるパーティとすれ違ひながら黙々と登り(この時間にすれ違うなんてこの人達は何時に出発したのだろう...)やがて道は大きく進行方向を変えながら等高線沿いに進み御池小屋に到着。なんでもログハウス調だった御池小屋は雪崩でつぶされてしまったそうで、プレハブ作りの仮設小屋だった。テン場に幕営し必要装備以外のものをテントに押し込んで、さあバットレスへ行きましょう行きましょう! 空は雲一つない快晴! さすが晴れの特異日だけのことはある。小屋からバットレスを眺めると4尾根を登っている人たちが見えた。私にはマッチ箱にいるパーティしか見えなかったが、笹平さんと吉田さんは他にも大勢取り付いてるのがみえたそうだ。んー、やな予感をいだきつつ歩き15分くらいで二俣に到着。沢沿いに進むと右手に大きな涸れ沢があらわれた。これがb沢じゃないかと進もうとするが、話に聞いていた目印の大岩がないので絶対違うと主張しさらに沢沿いの道を歩く。やがてb沢が現れたため進路を変更し bガリーの取り付きへと進む。取り付きへ着くとbガリーを登っている2パーティと取り付きで待っている1パーティがいた。今日は無理かもねと言いながらも登攀準備をし、取り付きで待っていたパーティが2ピッチ終了したところでようやくbガリーに取り付くことが出来た。私たちは50mのロープを持っていったので最初の20mルンゼと20mクラックを登ったところでピッチを切り、次の40mスラブに取り付いた。先週三ツ峠に行ったときに私のはいていたシューズを本チャンでつかうのはやめたほうがいいと言われ、急ぎょ前日に購入したシューズだったせいかなんとなく足にしつくりこす、この40mスラブでフリクショ

ンを効かせて立ち上がるときはちょっとドキドキした。緩傾斜帯に入ったところでロープをはずし4尾根に進んだ、つもりが2尾根の方に行ってしまったらしく、ふと振り返ったら4尾根への横断バンドが下の方に見えた。落石をしないように、自分が転げ落ちないようにと注意しながらそろそろと降りていった。これが今回の山行で一番恐かった場面である。どうにか横断バンドに辿り着き4尾根の取り付きの手前まで行ってみると、既に取り付いているパーティもいるは下で順番待ちをしているパーティもいるわいるわ、もう大渋滞だった。時計は12時になる前だったが日陰だったせいもあるってじっとしていると寒く、しばらく待ってみたがこのままいても取り付けるのは夕方、下手をしたらここでビバークになってしまいうことで出直すことに決定し撤退開始。取り付きで待っていたパーティはビバークするとのことであった。撤退するときに、草付きから懸垂しましょうと提案するが却下され、またそろそろとガレ場をドる。40mスラブの終了点から懸垂を2回してbガリーの取り付きに戻ってきた。明日はcガリーを行こうということで、取り付きまで行って下見をしてから御池小屋に戻った。4時を周り日もだいぶ頼んでいたが4尾根はあいかわらず大渋滞だ。2人はワインで私はお茶で身体を暖めてから夕飯を食べ、まだ明るさはあったがあまりの寒さに耐えかねて早々にテントにはいりシュラフに身体をいた。前日にほとんど睡眠をとったからか2人は横たわると同時に眠りについたようだった。そのうち私も眠くなってきたため横になった。ときどき目をさますと周りではあちこちで大宴会が始まっているようで、7時半ごろだったどうか「ヘッデンの星が輝いてるぞ。」という声が聞こえてきた。見たいー!と思ったが、強烈な寒さに負けてシュラフから身体を出すことができなかった。やっぱり見ておけばよかったと今になってちょっと後悔。12時過ぎにテントから出た吉田さんは登山道をヘッドランプをつけて下山していくパーティを何組かみたそうである。

明けて11日。4時に起床すると吉田さんが体調が悪いというので、吉田さんをテントに残し笹平さんと2人で出発した。二俣から少し進むとbガリー、aガリー、ピラミッドフェイス下部、第5尾根支稜、4尾根、それぞれに既に取り付いているパーティが見えた。みなさんビバークしたらしい、さぞや寒かっただろうに。天気は今日も快晴で、気温は昨日よりだいぶあったかい。下見のせいもあって迷うことなくcガリーの

取り付きに。するとここにもビバークの後が残っていた。準備をして早速cガリーに取り付く。笛平さんがハーケンを2本打って支点を作り25m凹角を行った。私は深呼吸をして後から続く。次の40mスラブでは両足ともにフリクションを効かせて立たなければ行けないところがでてきたため、念のためロープを張ってもらってから抜けた。cガリーはガイドブックに書いてあるとおり真っ白で、日が当たるとほんとにまぶしいくらいだった。cガリーの終了点についた後は右側の草付きを通り、横断バンドと4尾根取り付きの間のガレ場に出た。右側(bガリー側)から声が聞こえてきたため急いで取り付きの手間まで行くと昨日の大渋滞はどこへやら、4尾根はがらがらにすいていて私たちの前に1パーティーがいるだけだった。右側からの声の主は横断バンドよりもかなり上のほうに姿を現した。きっと昨日の私たちと同じように間違えて登りすぎてしまったにちがいない。取り付きで一息ついて先行パーティが見えなくなるのを待った。笛平さんが登り、私に登つていいよーと声がかかったころさきほどのパーティが取り付きにやってきた。人様に見られている、とまたどきどきしながら、それでもゆっくり慎重に登っていた。35mフェースを登り、顔を上げると目の前に三角形のビラミッドフェースの頭がど~んと居座っていた。その後まさに溝と言つていいくらい大きな白いクラックを、入り込みすぎないように注意しながら第一のコルへと到着。第二のコルにつくと目の前に核心である3mの垂壁があった。笛平さんが垂壁を越え右上に消えていった後岩をよく見ると、白いチョークの後が残っており、この連休に何人がここを同じよう

にして越えていったのだろうなどとつい考えてしまう。私も同じようにそこをスタンス、ホールドにしながらなんとか抜けた。右に抜け高度感抜群のリッジをはうようにしてマッチ箱へ。マッチ箱のところで先行パーティに追いついたため手前の隙間にセルフピレイをとつて腰を置きしばし休息。真っ青な空に北岳が映えていた。後ろをみると鳳凰の花崗岩がまるで雪のように見え、富士山も八ヶ岳も輝いていた。下の方に目を落すと御池小屋があり、私たちのテント(だったと思う)が見えた。先行パーティが見えなくなったところで懸垂開始。クラックにロープが引っかかるないようにやや右目に下降し3mくらい登り返す。降りてから登り返し始めるときのバランスの取り方がちょっとむずかしかった。次の40mではフェースから左の凹角にトラバースするときにクラックにはさまれている岩(石?)に両足を乗せてから大きく足をひらいてやっと届くところにしかスタンスがなかった(よう見えた)ので、このときは体がおっくくてよかったーと心から思った。その後40mリッジを登り無事終了点へ到着。セルフピレイをとったあとにわーいわーいと大喜びする。さらに10mくらいあがったところでロープをはずし踏み跡をたどって北岳頂上へ。頂上では最高の展望と最高の満足感とおばさん3人組が迎えてくれた。装備をはずして靴をはきかえ下山開始。草滑りを下っていくと吉田さんが手を振っているのがみえた。どうやら体調は回復したらしい。よかったよかった。テン場につくと前日大盛況だったテントはどこへやら、私たちの他にもう一張りがあるだけだった。荷物をザックにつめて下山開始。途中からヘッドランプをつけ



快適な登攀にVサインの渡辺

て広河原へ到着。ここでもあんなにあった車がすっかりなくなっていて、道路にも残っていたのは我々の車だけだった。甲府のインター近くで交通情報を聞くと中央道46キロの渋滞とのことだったので雁坂トンネルを通り秩父経由でもどってきた。

大体の時間です。

10／10

広河原(5:30)－白根御池小屋(7:30-8:00)－Dガリーの大滝－第四尾根主稜取り付き(12:00)－白根御池小屋(16:00)

10／11

白根御池小屋(5:00)－Cガリーの大滝－第四尾根主稜取り付き(10:30)－北岳頂上(13:00)－白根御池小屋(16:00)－広河原(18:30)

(渡辺 記)

## 奥鐘山西壁中央ルンゼ

1999. 10. 9～11

パーティ L本図一統、古山正文

いまさら奥鐘西壁なんて登る気力、体力、技術なんて持ちあわせていないけど、日本のクライマーになった以上一度は奥鐘を登りたくなると思いませんか。さんざん考えた末、登攀ルートは京都ルートに決定した。それは一番ハングが大きくて豪快なルートだからだ。もう一つ、アクシデントがあった場合どこからでも降りることが可能であるという理由もあった。

9日。一番電車に乗ろうと宇奈月駅に行くが、想像していた以上にクライマーが多くて驚いた。おそらく皆さんの目的は奥鐘であろう。その中で見覚えのある顔があった。JECCの廣川さんだった。10数年ぶりで、廣川さんは以前とくらべても、ちっとも年がとったようには見えない。でもちょっと白髪があつたかな？ 櫻平ではYCCの後に発電所で出発する。発電所でもう難所に遭遇、ザイルで懸垂しようとしたら（すこし大げさか？）YCCの道家さんが助けてくれた。皆さん、駅ではズックを履いていたので、それで邁行するのかと思っていたら、やはりザックに渓流タビをしのばせている人が多かった。でも中にはズックで行く人も見つけられた。水量は少なく順調に西壁対岸のベースに着くことができた。

早速渓流シューズ等をデボし、目標は大きく1ビバーク京都ルートを登るべく徒渉開始する。しかし、なんとドジなことか、私はスリップして朝一で泳ぐはめになってしまった。これですっかり目が覚め俄然やる気が出てきた。京都ルートは2番目に取付く。最初、悪くはないフリーなのだが、古山は調子が悪いのかちょっともついている。草が長く伸びており、スタンスが見えず、かき分けて登る個所もあった。浮石も多く落石には充分気を使う。先行は明日登るといって2ピッチザイルフィックスして下降していく。頭上には逆階段のようにハングが続いている。さていよいよ第一ハングの乗越しだが、古山は登る前から「登れないかもしれない」などと珍しく弱音を吐いている。今考えれば古山はこのとき完全に壁に圧倒されていたのである。つまり壁に負けていたのだ。案の定ハングにぶらさがったまま前進できず、そのうち腕がパンプてしまい降りてきた。こうなっては私がトップで登るほかあるまい。しかし、私が登っても古山が登れなければ同じことではないかとの不安もあった。ハングはリードもフォローも登るには同じ技量が必要だからだ。ザイルで引っ張りあげることはできないのだ。考えてもしょうがないので登ることにした。こんなでかいハングを越すのは10何年ぶりだろう。登りだすと少しずつ要領がよみがえってきた。京都ルートの中ではこのハングが一番苦しいと言われている。ハング上のフリーをこなし、ビレー点に着く。古山を待つがやはり登れないと言う。不安が的中してしまった。何年か前、原田さんを下ろしたと同じようにザイルで古山を下ろす。私も懸垂でヌンチャク等を回収しながら降りるも、ハング中間部のアブミは手が届かず回収できなかった。後続の男一人女二人パーティに回収をお願いする。後続の二人の女性はフリークライミングでもやっているのだろう、体の動きは軽やかでムーブが違う。良く見ると使っているフィフィが我々のとはちょっと違う。ハーネスとの連結紐が自由に伸び縮みできて便利だ。後でわかったことだがレッティングフィフィというらしい。彼女達も苦労はしていたが無難にハングを越していった。

10日。古山の精神的ショックは大きかったろうが決してフィフィのせいではない。古山のためにはいい勉強になったと思う。さらに登攀技術アップのための精進を期待する。リハビリも兼ね今日はハングのない中央ルンゼに行くことにした。取付きに行くとだれもいない。今日はトップだ、と喜ぶ。すぐ後に、お調子くらぶと静岡山岳会パーティが到着する。左のブッシュ帯から取付き、くさびの切れ目を目指す。下部ブッシュ帯を抜けるとク

サビの切れ目に3~4人見え、先行パーティがいることに気が付く。くさびの切れ目は難無く乗っ越す。残置ハーケンは少なくて結構緊張したフリーが続く。V角左壁の人工ピッチ下までは順調に進む。お調子くらぶの日塔さん達と今日は楽勝だなどと話しもはずむ。だがこれがあまかった。トップパーティのラスト（お客らしい）が一本のハーケンにぶらさがったまま動かなくなってしまった。この人は人工登攀をやるのは初めてなのではないだろうか。むなしく時間だけが過ぎていく。30分、1時間、この日取付いた全パーティが集まってしまった。我々の前の秀峰登高会のパーティは辛抱強く黙って待っている。トップパーティはガイドパーティらしいので、玄人パーティに素人が口出しするのも悪いので私も黙っていた。前日、我々も京都ルートでは後続に多少なりとも迷惑をかけた負い目もあったから。だがついに限界がきた。このままでは敗退が目に見えてきたので口出しをすることにした。あーした方がいいんじゃないいか、こうした方がいいんじゃないいかとフォローするがラチがあかない。お客は疲れきって声も出ないので、登攀技術じゃ皆さんに負けるけど、声の大きさでは誰にも負けない私がガイドとの中継をする。やっとのことでお客がぬけた。私はガイドパーティはここから降りるものだと思っていた。私だけではなくおそらく全員そう思っていたに違いない。しかしガイドは我々に詫びの一言もなく、そのまま先行を続けていった。それとは別だが、この中央ルンゼというルートは実に素晴らしいルートだ。わたしは奥鐘を気に入ってしまった。オイボレる前に是非又来たいと思う。

さて、ヤレヤレというわけで登高再開となる。しかし、ガイドパーティはラス前ピッチで又同じ状態になってしまった。よくこのような状態を蟬になるというがまったくその表現がぴったりだ。我々が一応決めていたタイムリミットの3時は刻々と近づいてくるが動かない。しかたなくここで下降することに決定。他パーティも下降し始める。秀峰登高会パーティはギリギリで終了点に辿り着いたか？いや、もしかして最終ピッチは登れなかったかも知れない。下降はガイドパーティを除く全パーティが協力して懸垂をスピードアップ。お調子くらぶのパーティが下降ルートを知っていたこともあり、全員暗くなる前に下降終了できた。話して分かったことだが、お調子の日塔さんも静岡の松永さんもACMLでは常連の方々であった。

夜、我々の所に秀峰登高会の小谷さん達がお酒を持って尋ねてこられた。ビバークの予定だったので今回は酒のない我パーティには最高のプレゼントで非常に嬉しかった。

11日。早朝下山開始、櫻平8時55分発で帰路につく。自宅着22時。

完登は逃したが、なぜか充実感のある登攀だった。それは他パーティとの連係プレーがうまくいった下降により、全員が明るいうちに降りられたことからきているに違いない。実際に楽しい皆さんであった。また機会があったら、秀峰登峰会、お調子くらぶ、静岡山岳会の皆様と列を成して登攀してみたいと思う。

それにしても、あのガイドはなにを考えているのだろう。さんざん待たせた後続パーティに詫びの一つも入れずに、トップを占領しているなんて。やはりお金をもらっての山行となると、そう簡単には敗退できないのだろう。

(本図 記)

# 松木沢ジャンダルム、岩トレ！

1999. 10. 17

パーティ L 本団一統、生井一男、古山正文、渡辺聰子、吉田仁

下館に集合して、がら空きの日光街道杉並み木を5名乗車でテールがグッと沈んだデリカを軽快に飛ばす。清滝を過ぎて、いろはの手前、細尾で、ステアリングを左に切る。ロールが、気になるが仕方がない。毎週末の過酷な使用で、ショックのへたりは否めない。約2時間のドライブで足尾ダムに到着。ここ足尾は、今から約400年程前、鉱脈が発見され、一時は国内銅産出量の40%を足尾銅山で産出されたが1973年に閉山。銅鉱石を製錬する際に出る亜硫酸ガスで地域一帯の山の木々が枯れ果ててしまった。しかし今は、治山事業で徐々に緑が戻りつつあるようだ。ダムに隣接している公園の駐車場に泊まることにする。明日は、早起きをしなくてもいいのでいつもよりも多くのアルコールを摂取して就寝。翌朝、ゆっくりと朝飯を食べて取りあえず車で、入っていけるところまで行くことにする。しばらく行くと、「通」って「行」け「止」まるなの看板が！素直で純粋なハートを持つACC-J茨城の隊員達は、その指示に従い突き進む。しばらくダートを進んで道幅の広くなつたところに車をとめてここから歩くことにする。目指すジャンダルムは、すぐそこだ。沢を、徒渉してガレを

登ると取付きに着いた。まずジャンダルムのてっぺんへ、3ピッチの旅だ。最初のピッチは、思ったよりホールドが少なくバランス感覚を要求された。2ピッチめは、バンド状を左上して、3ピッチめは、私がリードした。「なかなかバランスがいいな。」と、おほめの言葉をもらうが、この言葉でどれだけの人が山にのめり込んで行き、山に消へていったことか、恐いです！2回の懸垂で下に戻りアブミの練習をすることに。エイダーに乗るのは、初めてなので最初にレクチャーを受けて実際にやってみるがバランスを保てるのは2段目までがやっと。人工混じりの本ちゃんルートに行けるのは、いつの日だろうか。

(吉田 記)

岩トレの原稿は、  
つらいっす！



# 黒伏山・中央ルンゼ

1999. 10. 24

パーティ L 古山正文、生井一男、吉田仁、渡辺聰子、笹平孝

山形まで高速道路を走って、黒伏山の前にあるスキーフィールド入り口に、テントを張って仮眠した。

翌日は、スキー場から少し下りた所に車を止めて、そこから林道に入った。林道といっても、沢筋にある踏み跡を上がって行くのだが、出だしから急登ですぐバテてしまった。

キビタキの池は、少し湿っている程度だった。ここから少し上がれば中央ルンゼの取り付きになる。この辺は、ヤマブドウが沢山あって、丁度いい時期なので、採って食べた。今回は、古山さん、吉田さんと、生井さん、渡辺さん、笹平で分かれることになった。

まずは、古山さんたちが先に行った。1ピッチ目は、ハーケンがたくさん打ってあり、安心して登ることが出来た。4ピッチ目の所は、50メートルロープでぎりぎりだった。近くにアブミが落ちていたので、カラビナだけ手に入れた。ここから上部まで一気に突き上げているのがよく見える。5ピッチ目は、3級プラスのピッチなのにやけに難しいと思ったら、ルートを間

違えてしまって、時間がかかってしまった。

6ピッチ目は、浮いている岩が多くて、なかなか進むことが出来ない。岩をで叩くと、浮いているのが解りながら、その岩を掘んで登るので、精神的に疲れた所だった。

7ピッチ目からは、垂直になるのでアブミを出していく。渡辺さんは、確か1、2回しかアブミを使っていないのに、登ってくるのが早かったので感心した。

最後のピッチは、上部のボルトの間隔が離れていて嫌な所だったが、先行の古山さんがアブミを残置してくれていたので、助かった。終了点のテラスは狭くて、5人集まると立っていられる所がなくて、大変だった。

下降は、ここから懸垂下降で下りた。下り始めてまもなく、ドスンと鈍い音がしたので何かと思ったら、隣のダイレクトルートを登っている3人のパーティの1人が、落ちて行った。バウンドしながら15メートルぐらい落ちた所で、ロープが張ったので止まった。トップの人が落ちるのは触るが、今回は、セカンドの

人が落ちたので、おそらくセルフブレーを取るのを忘れていたからだと思う。怪我はそれほどでもなさそうで、自力で動けるみたいだった。その光景を見たら、懸垂下降をするのがなんだか怖くなってきた。いつもシットハーネスなので、連続して懸垂下降をすると、

腰のところが食い込んで痛くなる。今回も痛みとの戦いだった。そろそろ違うハーネスに買い替える時期かな。

(笹平 記)

## 谷川岳・一ノ倉沢中央カンテ・冬期登攀偵察

1999. 11. 7

パーティ L 古山正文、笹平孝、生井一男

以前より懸案になっていた中央カンテの冬期登攀の話がまた現実になってきた。この山行の起案は某M氏との間で交わされた契約（いにしえの契約）であった。それは〇〇年もむかしに始まった。しかし、今まで何度と無く山行の話が浮かんでは消えるといった状態で、ここ暫くはタブー化していた。それが今年また浮かび上がって偵察をしようと言うことになったのだ。

話が進んで、いざ偵察という矢先に本団さんから送られてきたEメールの中で何と新人と今度の休みは、山に行かなければ行けないので、

『11月の上旬には、古山か笹平と中央カンテの偵察に行ってくださいよ！』  
というコメントが入っていた。

『行ってくださいよ』？？？。って本団さんは行かないんだ。『おい、おいらちゃん、それはつれないよなあ』。結局、私はふられてしまったのである。

『いいんだ。どうせ肌がピチビチの若い方が良いんだろうよ。あれほど行きたがっていたのに！。グレてやる。中年がグレたら恐いんだぞぉ！』

と思いながらも古山氏と笹平氏に連絡し、7日に偵察に行く事にした。

6日の晩、古山さんと笹平が私の家まで迎えに来てくれて、古谷さんの車で行く事となった。猿島から古河を通って館林から国道50号にぬけ桐生のいつもの所から裏道に入していく。古山さんのレガシイも調子が良い。巨人のN氏じゃないが“絶好調！”である。暫く行くと前方にデリカが一台飛ばして走っていた。デリカのすぐ後ろまで接近すると、そのデリカはまるで我々と同じ匂いを発していた。そういうえば本団氏のデリカに似ているなぁと思っていると古山さんが

『あのデリカ本団さんのですよ。テールのフォグラランプ、両サイドに着いているあのランプは明らかにそうです。間違いないですよ。』

と口角泡を飛ばす如く前方を行くデリカに向けて声を発した。古山さんの言葉通り、明らかに本団氏のデリカに間違いないと確心した我々は、どうにか前のデリカに我々の存在を知らしめるべく近づこうとするが、デリカのスピードについて行くことが出来ない。まる

で逃走車を追いかける刑事の車のような勢いでスピードを上げていくと運良く信号でデリカが止まった。慌ててレガシイから降り、デリカの窓をたたきながら運転手に

『何処から来たの？まさか茨城じゃないでしょうね。ちょっとスピードの出し過ぎじゃな～い？免許書を拝見します。はい。』

と軽く声をかけると、すると運転手はびっくりしたような顔で『生井さん！？？、後ろのレガシイは生井さん達だったの。生井さんとメンバーは誰ですか？』と運転をしていた吉田が聞いてきた。私が『俺と古山さんと笹平の3人だよ』と答えると他の同乗車（本団、高木、渡辺）も皆私の事がわかったようだった。『偶然だなあ、我々は巻機山の米子沢に行くんです。生井さんは谷川ですか』『そう、中央カンテの冬期登攀の偵察だよ。それじゃ、そちらも頑張って行って来て下さいネ』と言葉を交わし別れた。

レガシイに戻り、2人に前車（デリカ）で交わした話の詳細を語りながら谷川岳に向かって車を走らせた。

一ノ倉沢のパーキングに車を停め、古山さんのゴアライトで仮眠を取り、翌朝、早く出発した。恒例の40メーター懸垂を行なった後、テールーリッジに取り付き、大汗をかきつつ、中央稜の基部に着いた。ここで一休み、煙草を一服しながら下から吹いてくる爽やかな風に身をまどろませ、久しぶりの一ノ倉の風景をじ～と見下ろしいると、相変わらない風景が、まるで古い旧友にあった喜びに似た心境に包まれる。

そんな心境でいると、『さあ、行きましょう』と古山さんの声に現実に戻された。中央稜の基部からまわりこみ、中央カンテの取り付けに到着。

『冬期は、取り付けはもっと上からでしょうね。たぶんあのシュリング辺りだろうな』と凹状の落ち口へ回り込む所を見上げてハーケンとかシュリングとかの場所を確認して記録した。

早速、まずは笹平がトップで行く。彼も実績を積んでかなり熟練者の風貌をかもし出してはいるが、時々ルートファインディングが悪く、突拍子もないルートを行ってしまうという一部の噂があるが、ハテサテ事

実はいかなるものか・・・？。

ハーケン、シューリングの場所をチェックし、冬期にはどうなっているだろうかと推察しながらデーターを取りつつ2、3、4、5ピッチと順調に登っていく。彼氏も何の問題も無く登攀を楽しんでいるかに見えたのだったが、チムニーをからバンドを出てフェース(II)を左上し、カンテラインのフェースを右上し凹角を目指していくのだが、ザイルのがなかなか流れない。古山さんも心配になって『どうしたんだぁ！上の凹角を目指して右上するんだぞ』と声をかけると『すみません。間違えました。降ります。』との声がした。登り直しているようで暫くすると『ビレー解除』の声が聞こえた。

早速に登っていくと正面ルンゼ上部の垂壁にザイルがかかっていた。『はは～ん、あのザイルに導かれるよう左の方へ登っていちゃったのかな？』と思いつながらスルスルとビレー点到着。古山さんはしきりに三スラの草付きで笹平がルートを間違ってひどい目に遭った事を耳にタコが出るくらい私にばやくのであったが、私は『ふ～ん、たんへんだったね』と軽くあしらっていた。

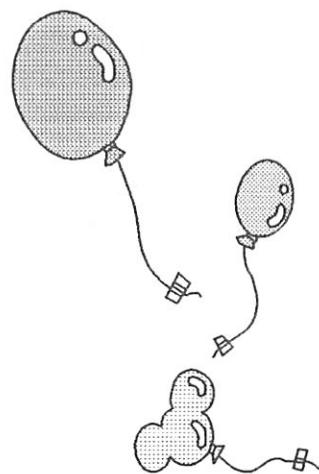
この先は確心である四畳半テラス下の凹角である。

ここからトップ交代で、古山さんが行く。難なく確心の凹角を越し、四畳半テラスに出たようだ。続いて私(生井)が行き、その後を笹平とこれも難なくクリアし古山さんの待つ四畳半テラスに到着した。この先是、データーを取りながら、難なく終了点まで到着した。

ここから空懸一回でダイレクトルートの終了点へ下降し、熊笹の中の踏み跡をたどって六ルンゼの懸垂点まで行き、無事、中央カンテ偵察を終了した。

あとは、決行日が来るのを待つだけである。

(生井 記)



中央カンテ終了点近くを登る

## 巻機山・米子沢

1999.11.7

〔本図一統、高木均、吉田仁、渡辺聯子

本図さんから『1～2日で米子沢の原稿かけますか？』というメールがはいりました。なんでも米子沢の原稿が編集局から脱走したことです。私はこのメールは問い合わせと解釈し、今日、明日中に仕上げるのはちょっと無理ですという返事をだしました。しかし、この行間は『米子の原稿を急いで書け！』ということであると後のやりとりでようやく理解した私はまだまだ甘かったようです。何度か脱走を試みたのですが（そんなことしているなら素直にかけばよい、とも言えますが）逃げ切ることはできませんでした。

では、記憶の糸を手繕ってみることにいたしましょう。どうも本団さんからのメールには驚かされることが多いようです。確かあの時の山行連絡もメールでした。あれはめっきり冷え込んできて、あちこちで初雪の便りが聞こえてきた頃だったと思います。『行く場所 登川米子沢』という文字を見てはじめはなにかの間違いだと思いました。なぜに沢?と聞いてみると『他に行くところが無いから』、そして極めつけは『なんだって米子に行きたいって言ってたじゃねーか』とのお言葉です。間違いだと思ったわたしが甘かったようです。確かにやってみたいとは言いましたが11月に行きたいと言った覚えは…。なんだかんだ言いつつもすでにしまい込んでいた沢靴を引っぱり出し出発しました。明日が寒くないことを祈るのみです。巻機山登山口の駐車場に到着しテントを張る

べく車から降りると案の定とても冷えこんでいます。この瞬間私はテントではなく車の中で寝ることを決意し、テントを張り終えるとすぐに車にとび乗り自分の巣作りを開始します。でも強者達はそんな私をあざけり笑うかのように冷えたビールで乾杯しようとしていました。

朝、目が覚めるとやっぱり寒いです。高木さんがいってくれた暖かいコーヒーにはげまされ出発しました。出発するころには空には青空がひろがり、寒さも感じなくなっていました。わたしの祈りが天に通じ今日は暖かい日のようにです。米子橋の右側の林道を少し歩いた後、水の無い河原に下り河原歩きを楽しみます。やがて水が現れてきて遡行っぽくなってきたと思ったらどどーんと30m滝のご登場です。いつもの私でしたら『右を越すって書いてあります！』と主張するのですがどんでもございません。素直に巻きます。右岸から合流してくるナメ沢を見上げうまい名前をつけるものだと感心します。後で井戸尾根から見おろすと本当に上から下までナメナメしている沢でした。次にでてきた6mおよび3段40mの滝のときは、6mの落ち口まで進み登りたいとちょっと考えます。すでに左を巻いて上に立っている吉田さんに『ビレーしてやるから登りなよ。』と言われますが冷たい水しぶきに負けました。2つの滝もおとなしく巻いて左岸にわたり先へと進みます。ここから12mスダレ状の滝まであんまり覚えていません。ただ、吉田さん



米子沢にて…吉田、高木、渡辺

がまるで何かに追われているかのごとくえらい勢いでガシガシと先頭を歩いていましたので、遅れないようにとしていたことだけを記憶しています。そしてさらに簾のように水が流れている滝を横目に見ながら先へと進み上部ゴルジュ帯入口までやってきたところで一息です。上部ゴルジュ帯に突入しはじめるとすぐに太陽が私たちに追いついてきてくれて、滝の落ち口につぎつぎと小さな虹をつくってくれました。頭から水を浴びるのはご勘弁ですが（もちろんそんなところはありませんでしたが）もう手足が多少濡れても平気になっていました。滝を右から左から次々と突破し、ふと見上げると大ナメが静かにご登場です。巻機山山頂、いえ空まで続いているかと思わせる美しくて長いナメでした。そんなナメもやがて終わりを告げ、二俣に到着しここで昼食をいただきます。

本図さんがごちそうしてくれた甘酒がとっても美味でした。風はなく日差しはぼかぼかとしていてとってもいい気分です。でも、陰のほうにあった雪が間違いない季節は冬に向かっていることを教えてくれました。

右俣を進むとやがて水流は細くなり、水が涸れる前に沢から離れ踏み後をたどって稜線へ向かいました。ここ米子沢の最後の詰めはわたしがとても苦手とするガレ場及び藪こぎが全く無くとてもいい感じです。巻機山山頂は100名山にもかかわらずひっそりとしたたたずまいできれまたいい感じです。谷川岳もはっきりと見え、いまごろ中央カンテを偵察登攀しているだろう3人に心中でエールを送り頂上を後にしました。

巻機小屋でギアをはずし靴を履き替えていた時に、吉

田さんが『俺、水を汲んでくるのを忘れたんですよ。』と言うと本図さん、高木さんも次々と『あっ、すっかり忘れてた！俺もだ。』『俺もだ』と声をそろえて言います。強者達はどうしたかと言うと、うらみっこなしでジャンケンをし負けた高木さんが3つの水筒をもって水を汲みに沢の方へ下って行ったのでした。わたし？わたしはちゃんと水1リットルを持っていましたもの(\*^\_^\*)。

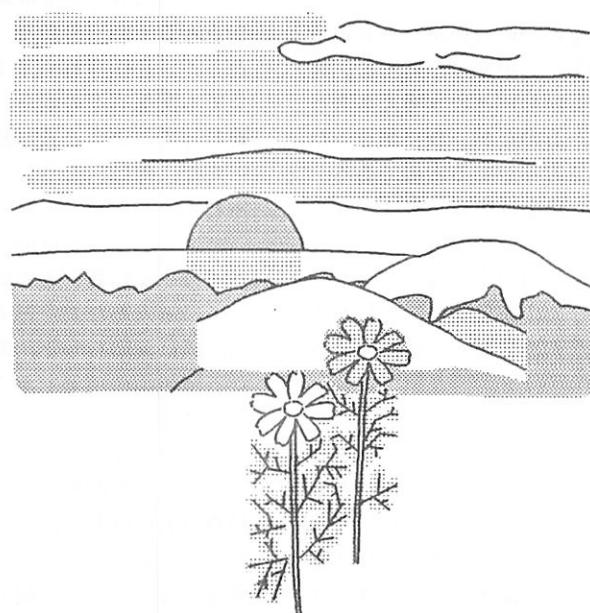
10分ほどで高木さんが戻り、強者達が無事に水を手に入れた後出発です。ニセ巻機山を越え井戸尾根をくだります。ここでも吉田さん、それに続いて高木さんはガシガシと下りあつという間に見えなくなってしまいました。今度は多少遅れてもいいか、という気持ちで木漏れ日を浴びながらマイペースでくだります。途中どころどころで展望が開け、今まで邇行していた沢を一望できたりしてこの下りもなかなかいい感じでした。やがて駐車場に到着し、駐車場の片隅に生えていたぐみの実を食べて巻機山を後にしました。

小春日和の一日でとても楽しい一日でした。この日から経つこと3週間、本図さんから吉田さんとわたしに山行連絡のメールが入りました。

『行く場所 丹沢女郎小屋沢および子割沢 ダブル邇行ですよ、楽しいでしょ。』と。『・・・・・・』。

確かに楽しかったんですけどね・・・。

(渡辺 記)



# 西上州・鹿岳&荒船山

1999. 11. 14

パーティ L 本団一統、吉田仁、渡辺聰子

西上州に東福寺渓谷という所がある。なんでも岩峰がニヨキニヨキとあり日本離れした景観とか。実はここには10数年前、生井と来たことがあって、車を川に脱輪させひどい目にあったのだ。その時は沢沿いに少し登ってみたが、魅力的な岩峰など見つかず戻ってしまった。今日はルートを変えての雪辱戦である。今回は東福寺川左岸尾根上の林道を使って、はさみ岩付近にバイクをデボし、東福寺川右岸尾根の林道から栗原山へススの峰と縦走する計画であった。あくまでも計画上ではうまくいく筈であった。実際にはエアリアマップに出てる林道が発見できなかった。今は無くなってしまったのだろうか？夜なので視界はなく、頼りはGPSだけだが、今回はかなり役に立ってくれた。夜中なので尋ねる人もいないからだ。GPSは、現在地は持倉であると表示している。ちょっと来過ぎてしまったようなので、戻りながら林道を探すが見つからない。明るくなるのを待ってから移動しても時間的に縦走は難しいので、今回はあきらめて鹿岳に変更したほうが賢明では、ということになった。鹿岳駐車場まで移動する。

14日、晴れ。マメガタ峠に向かう。西上州に来るといつも思うことであるが、急斜面に点々と家が建っていて、よくもまあこんな所にと感じるのだが、やはり住めば都なのだろう。ハイキングコースなので別に記憶に残ることはなかったが、クライマーの悲しい性とでも言おうか、岩場を見るとついついルートを追ってしまう。たしか鹿岳にはルートがあったはずだ。まあ、どんな岩質か真近で見てみたいという考えもあったのが来た一つの理由でもあるのだが。我々が登ったミドリ岩北西壁と比べると見劣りがする岩場である。相変わらず一の岳も二の岳も頂上は中高年者ばかりであった。眺めは抜群で、松沢岳、烏帽子岳、大岩、立岩、毛無岩と今まで登ってきた山が手に取るようだ。その中で西の方向に妙な恰好の山が見えた。気になる山の一つである荒船山だ。なんの気なしに時計を見た。

“ん！まだ午前中なんだ”

「なべちゃん、今から荒船登んない？」

私は渡辺嬢に対し呼び方が一定していない。「おねーさま」「おねーさん」「ねーちゃん」「わたなべちゃん」「わたなべさん」「わたなべくん」「わたなべー」「なべちゃん」「さとちゃん」とその時の気分で変わる。先日新聞で知ったのだが、前者3つの呼び方はセクハラに当たることなので、今は使わないようにしている。機嫌の悪いときは「わたなべー」だから、

その時はサトちゃん、俺に近寄らない方がいいと思うよ。

話が横道に逸れてしまったので元に戻そう。地図で所要時間を計算してみると、暗くなるまでに降りられそうである。吉田もガゼン乗り気になってきた。すぐ下山して荒船山に登り返すこととした。いわゆる山のハシゴである。私は量が飲めないので、飲み屋のハシゴはあまりしたことないが、山のハシゴは大好きだ。一番西よりのルートから車まで走るように降り、すぐに相沢登山口に移動した。

さすがこの時間になってから登り出す人はいない。きっかけは何だったか忘れたが、歩きながら宮様の話になった。皇太子ご夫妻が山登りが好きなことは有名だが、ある山に登山することが決まると、関係省庁はそのコースの整備をする。手摺りや階段を作り、落石危険地帯はその対策工事をする。場合によっては仮設トイレまで作る。皇太子になぜ野キジの爽やかさを教えてやらねーんだ。お供やマスコミの連中に聞まれて歩かなければならないので野キジは無理なのか？皇太子ご夫妻はこれでも楽しいのだろうか。いや、あの方々はあれでもきっと楽しいのかもしれない。私が感じるに、困難（危険）のまったく無い登山ほどつまらないものはない。その困難（危険）をいかに突破したり回避したりして行くかが面白さの一つだと思うのだが。皇太子に沢登りでも経験させたらヤミツキになってしまうんじゃねーのかな。でも沢の中にハシゴと手摺りとトイレを作られてしまったらかなわねーな。それでも関係省庁の奴ら、宮様登山の時だけ整備して、終わってしまうと荒れ放題というのは俺は我慢ならねーんだ。俺は、そういう時だけ整備するんならやんじゃねえと言いたいんだ。

ノンストップ1時間と少々でトモ岩に着く。するとハイカーが結構いるではないか。みんな遅くまで行動しているんだなあ、と不思議にも思った。ここからの高度感は素晴らしい、壁の縁に立つと足がすくみそうだ。荒船山の頂上である行塚山に向かう。子供連れのハイカーもいて、みなさん暗くなるまでおりられるの？と自分達のことはさて置いて心配になった。しかし、頂上で地図を見てこの謎が解けた。それは荒船不動尊の方に降りれば30分で車まで降りられることがわかったのである。コーヒータイムを取ってしばしの笑談、後は夕暮れと競争して相沢まで駆け下った。真っ暗くなった頃、荒船の湯に到着、汗を流して帰途についた。

東福寺渓谷は又の機会にアタックしよう。3度目の正直で完登なるかな？

鹿岳登山口(9:00) — マメガタ峠(9:31~9:49) — 一の岳(10:23~10:42) — 二の岳(10:56~11:17) — 駐車場(12:02)  
荒船山相沢登山口(13:00) — トモ岩(14:22) — 行塚山(14:56~15:26) — 登山口(16:45)

(本図 記)



鹿岳頂上にて

# 谷川岳・一ノ倉沢・南稜

1999. 11. 14

パーティ L 古山正文、笹平孝、生井一男

先週に引き続き、またまた谷川岳にやってきた。また何で来たかというと、先週は中央カンテ冬期登攀偵察（本図氏懸案）の為に古山、笹平両氏に付き合ってもらつたので、今回は両氏から冬期南稜を登るのにやっぱり偵察がしたい、との申し出がありまして・・・。それじゃ先週のお返しにという事でやって来たのである。

まずは、テールリッジをいつものように大汗をかきながら登り、中央稜の基部で一休み。その後、烏帽子奥壁の基部を落石に気をつけながら、南稜のテラスへ。今回も笹平特攻隊長が先人を切る。古山さんがセカンドで登り、支点（ハーケン、シュリング）の記録をつけていくと云った先週と同じパターンで登っていく。

チムニーはアイゼンをつけているとどうだろうか？。ハーケンは見つかるだろうか？。雪が着いた場合を想定していろいろ考えて登っているので、時間がかかってしまった。

古山さんと馬ノ背リッジに出る。ここ奥壁側のクラックではアイゼンをつけていたのでは悪いんじゃないかななどと話ながら登っていくと最終ピッチに辿り着いてしまった。

『ここは、冬期はアブミを使ったほうがいいですね、今なら難なく登れますけど雪が着いたらどうなるか分かり

ませんね？』

『トップが登って残置してもらって、それを使えば.....。

それでいいんじゃないかな』

『.....。』

そしてフェースを登り、終了点へ。そして6ルンゼを下降し、南稜テラスへ戻った。

テールリッジを下りながら、『12月に登りに来ましょう。登るんだったら今年のうちに』と古山さんがしきりに言っていたが、私としては雪の多い2月辺りがいいと思っていた。

降りながら『12月に決行だ』いや『雪の着いた2月がいい。登るんなら2月だ』と両者の意見が真向対立し、決着は着かず！！！。果たして一体決行日はいつになつたのだろうか…？。

(生井 記)



南稜の1ピッチ目を登る

# 表妙義縦走

1999. 11. 23

パーティ L 古山正文、生井一男、渡辺聰子

今回はいつもと違って一度も気を失う事無く、でもいつもと同じで全く役に立つことなく石門入口近くの駐車場に到着した。テントを張って、シュラフにもぐり込んだと同時に生井さんは眠りについたようだった。わたしも寝付きの早さだけはちょっと自信があるのでけれど、生井さんには勝てないんだなあ。かろうじて1勝をあげただけで、あとは全敗だ。

翌朝、準備をして石門入口へ。前回、西上州に行くことになったときに『水墨画のような風景を楽しんでおいで。』と言われて、でも実際行った所はそんな事無くて？？？と思っていたのだが、ここに来て初めて理解。確かに水墨画のようだ。‘かにの横ばい’や‘かにの縦ばい’を通って石門をくぐり少し行くと広場にでた。第4石門の上方を見上げると、たいはうだああ。万人が万人とも大砲を連想するであろう‘大砲岩’をしばらく眺め、先へと進む。古山さんの後について歩き、ふと気付くと後ろに生井さんがいない。目を遠くにやると生井さんがビデオを構えてこちらにレンズを向けている。こんなシーンが何度か繰り返されながら先へ進んでいった。2段25mの鎖場ではロープを出してもらって登る。今思えば登山靴で岩を登るのはこのときが初めてだった。そして、このときこそ

ビデオに撮ってもらえばよかった、きっとプラボーに登っている姿が収められたに違いなかったのに・・・。

(と思っているのは自分だけ?) 続く鷹戻しは懸垂で降りた。茨尾根からは裏妙義の丁須岩や雪をかぶった谷川の稜線などを見ることが出来た。その後2~3度古山さんの寿命を縮めながら歩き、相馬岳に到着。石門入口から相馬岳までは殆ど人に会わなかったのに、相馬岳では多くの人がお弁当を広げていた。相馬岳を過ぎ、天狗岳を越え、次の岩の登りの時には生井さんにカメラを準備してもらった。まず古山さんがひょいっと登っていった。よしと思って力がはいったのかそれともこれが実力か、登りながら自分でこりゃダメだと思う。振り返ると生井さんは大喜びだった。その後数カ所の鎖場を越え、奥の院に到着。人の字岩峰によって妙義神社に下り、お参りしたあとタクシーで車まで戻った。

帰りの車の中で生井さんの撮ったビデオを見せてもらい、反省ザルとなって帰ってきた。

(渡辺 記)

# 女郎小屋沢～小割沢

1999. 11. 28

パーティ L 本団一統、渡辺聰子、吉田仁

今世紀も終わりに近い11月28日、沢登りに行って参りました。こんな寒い時期に物好きだと思う輩も多いだろうが、好きなんだから仕方がない。というわけで、桜土浦から常磐高速に乗り、首都高速をへて東名へ！めざすは丹沢の女郎小屋沢&火打ち沢。なぜ2本も登るのかっていえば話は簡単、ずーと高速つかって行くしかないので貧乏性で欲張りな我々は、2本まとめて、やっつけちまおうということになったわけ。まず最初にかたずける女郎小屋沢のトボを見ると、いたってシンプルめちゃくちゃ簡単そう。これなら昼には車に戻って来て、午後一で次の沢に入れるなって余裕をかましビールを食らってなんの不安もなくシュラフにもぐり込んだ。(そんなにうまくいくのかしら)

朝、五時に起床。6時に出発、ヘッ電はいらないようだ。さすがに、吐く息は白い。20分ほどの林道歩きで、玄倉川への降り口に着いた。踏み跡をたどって

河原に降り立つと”ビンゴ”目の前は女郎小屋沢の出合いだった。ここでハーネスを装着、メットをかぶり靴ひもを縛り直して余裕の表情で入渓。このあとに、たびかさなる試練が待ち受けていようとは知るよしも無く、そしてすぐにそれはやって来た。小さい釜を持つ2mの滝での事だ。こここのところ核心部以外は放し飼いにされているオレ達は自分の好きな所から攻めることが出来る。本団さんは、右から行くというので、じゃあオレは左からと釜をへつりだした。するとみごと最初のスタンスが崩れて”どぼん！！”胸までつかってブカ～。まだ日も登らぬ7時前の出来事である。今まで何とかドボンは、免れて来たオレだが、1999年も終わりに近い11月の末にミレニアムドボンをするとは。身も心もグチヨグチヨです。気を取り直して、服を絞りながら遡行再開、F2-15mに到着。ここでロープを出すことにした。本団さんに、名譽挽

回で「吉田行け」と指令を出された。ありがたき幸せとルートを読むが、ちょっと悪かあーないですか！その旨を伝えると、こんな所は、片手片足、ロープを出すのも恥ずかしいとの事。『ん～、そんなもんかしら』と、ちょっと不安げに取り付いた。取付いたはいいけど、悪いというよりイヤラシイ。ぬめるしホールドも意外に少ない。何より10mほど登らないとランナーが取れない。なかなか次の一步が出ずセミになりかけていると『よしだ～降りてこい』の声がかかった。ふ～助かったーと、へっぴり腰でクライムダウン、木団長にかわってもらった。さすがに、いぶし銀のムーブで難なく登りきり上からビレイしてもらう。上から吊ってもらえば、こっちのものさっきまでの不安もどこ吹く風、難なく登る事が出来るでは無いか。精神的弱さを痛感しちゃいました。これを克服するには、登り込むしかないだろう。全く簡単に抜けられるだろうと、高を括っていたけど、やられっぱなしである。このふんだと、火打ち沢の廻行は、怪しくなって来た。先を急ぐ事にする。F3～F5は、順調に通過、そして野猿棚下のF6は、協議の結果巻いた方が早いだろうと高巻くことにした。しかしこれが、裏目に出た。巻道が意外に悪い。ズリズリの崖を木登りで、いたずらに時間を喰ってしまった。このへんで、火打ち沢は、諦めることに、焦らずゆっくり行くことにする。F7～45m野猿棚を、じっくり登っていくが、ここは簡単ほと

んど階段だ。最後の一部分だけぬめて悪いので、お助け紐を出してもらいそれを、ムンギュとつかみこの沢のハイライトは終わり。すぐに水が消えてガレゴルジュに。そこをトコトコと進むとF8～5m～CSが見えて来た。（お～、我がふるさとの山、筑波山の弁慶七もりみたいではないか！）それと同じように潜ってそこをこえる。出口でバチリ！記念撮影。さらに沢なりに進むこと數十分藪清ぎもなく女郎小屋乗越しに、到着。反対側の小沢を駆け降りて東沢へ。東沢の山道を下って懸垂にて、小川谷の出会いに降り立つ。そして懐かしの沢小川谷の終了点で大休止。後は、小川谷廊下の下山コースを辿って車に戻った。最後に女郎小屋沢を廻行しようという読者にアドバイス。トボ図のシンプルさから舐めてはいけません全体的に悪いです。それと、女郎小屋は、どこにもありませんので淡い期待を胸に大枚を持っていく必要はありません。それでは！

(吉田 記)

追伸…。

小割沢は省略させていただきます。



丹沢の弁慶7戻り

# ビーコン搜索訓練

1999. 12. 5

パーティ L 本岡一統、木村一、笹平孝、吉田仁、渡辺聰子、菊地光夫

今年も山に雪の便りが聞かれる今日この頃。会の集会では雪山本番前には、毎年、実施している雪上訓練に加えて、今年はビーコンを使用しての搜索訓練を行なう事に決まる。

以前に都岳連主催の雪山レスキューリーダー養成講習会があり、当会でも4人程の者が受講して、良い経験を積んできたと言っていた。これから雪山シーズンはビーコンは山で活動する者にとっては必需品と思われる。しかし、価格も高く、普及率も低いが、是非茨城岳連でも講習会を開き広く普及させてほしいものだ。

今回の山行場所は谷川岳天神尾根に決まる。会山行なので全員参加のはずであったが当日仕事の関係で2名ほど欠席になる。

車を谷川岳ロープウェイ直下の駐車場に停め、朝一番のロープウェイで天神平へと向かう。スキーヤーや、スノーボーダーで混む為に切符は往復切符を購入しておく。

天神尾根の末端となるべく雪の深そうな所を捜し、実技講習を行なう。今回はビーコン操作が初めての吉田、渡辺、菊地の受講生がいるので、本岡講師にビーコンのメカニズム及びゾンデ棒の使い方、スコップを使用しての搜索方法を一通りの説明を聞き、そしてビーコンを発信状態にしてザックに入れて雪の中は踏め

てタイムを計測しながら一人一人順番に練習をする。デジタルビーコンは赤い点滅の矢印の方向に進み、距離の数字が小さくなるのでこの付近と思われる所に急いでスコップをいれ、ビーコンを見つけ出す。そして発信モードを止める。

今回は目標物が小さいのでスコップを入れて掘り出すまでは不安である。タイムを測定しているので、みな必死でチャレンジしていた。今回は、雪が少なかつたからかも知れないが、平均タイムで3分前後でザックを見つけることが出来た。早い人で1分30秒前後。そして一番遅い菊地でも4分前後で発見できた。……と思う。

次に大量遭難を想定して何人が雪崩に巻き込まれた、という事で2台のビーコンを別々に発信モードにして雪の中へと埋める。最初に笹平が手本ということで、1台、1台を遠くに離して雪の中に埋めたが、1台目を即発見して、発信モードに切り、次の発信モードを見つけるという要領で手際良く出来た。訓練していて考えさせられたのが、2mか3mのすぐ近くにビーコンを埋めると着信用のビーコンは、両方に反応して『あれ?、あれ!』と戸惑い目標が定まらなくなつた。多少の難しさは経験と練習が必要である。

後、今回は雪不足の為出来なかったが雪深い所で深



どこだ?。どこだ?。

さに対してのピーコン操作も練習をしてみたい。

午後より笛平君が班長になり、尾根の傾斜のある所に場所を移し、滑落停止の練習及びザイルで確保しての急斜面の下降練習をする。こうして4時頃まで練習をして帰りもロープウェイを利用して下の駐車場へと行くが、下に着いて回りを見ると本団氏が居ない。ロープウェイは一緒に乗っていたのに・・・彼は、何処へ行ったのか？仲間に聞くと本団さんはロープウェイ切符売り場で払い戻しを受けているとの事。『なぜだ～！？？』。キセルは、彼は何年も前に足を洗ったのでやらないし、？

？。と考えていると、そこへニコニコ顔の本団さんが、『900円もうけ』と言いかながら『山は顔で登るもの。長い事山をやっているとたまには良いこともあるもんだなあ、菊地～』とか何とか言いながら水上のいつもの温泉へと消えていった（本団さん、懺悔のつもりで忘れない為にも記載しておきました）。

（菊地 記）

## 房総・キンダン川&伊予ヶ岳

1999. 12. 12

パーティ L本団一統、吉田仁

キンダン？私はこの言葉を聞くと、すぐ”禁断の恋”をイメージしてしまうのだが、キンダン川の名前の由来はどこからきているのだろうか。もしかするとアベサダ事件でもあったのでは？だって金断だもの。

いくら暖冬といつてもこの時期に沢登りは、ちとサブイ。暖かいといわれる房総に行ってみることにした。待ち合わせ場所は沼南町役場。流山に住んでいる吉田にとって、こんな近い待ち合わせ場所は2度とないかも知れない。だけど俺の家からは、すんごく遠く感じた。房総に行くことは決まっているが、どこの沢に行くかは決まっていない。とりあえず16号線を房総に向けて出発した。梨沢の資料はあるがマイチ感が否めない。キンダン川は、昔、遡行の記録を読んだことがあるような記憶がある。キンダン川ってどこにあるんだろう。手元にある道路地図で探してみると天津小湊町の近くにあった。よし、ここに行ってみよう。しかしだ、地図もなければ資料もない。どこから入渓したらよいかも分からぬ。そうだ、こういうときは地元の人に聞くのが一番と、阿部ちゃんの所に電話を入れるが、あいにく留守のようで電話には出なかった。じゃあコンビニで地図でも探そうかと思う頃は、すでに田舎道を走っており結局現地に着いてしまった。オートキャンプ場らしき所の側の空き地でオートビバークとした。朝になったらこの人に聞くためであった。

早朝起き出しが、さすが房総、霜も降りていず暖かい。キャンプ場に行ってみるが、犬に吠えられるだけで誰もいない。さて困った。近くの人家で聞いてみたり、車でウロウロ探しているとハンターがいた。聞いてみると要領を得ない。さらにウロウロ。地元の人発見。少し要領を得られた。近くに車を止め早速入渓。

小櫃川を少し溯り右岸から入るキンダン川に歩を進める。我パーティの頼りとするものは10万分の1の道路地図と磁石だけだ。山を甘く見ていると言われそ

うだが、それはしかたがない。だって本当に甘くみているんだから。たかが標高300m位の山だからと甘くみているのは事実です。

やがて岩のトンネルだ。尾根が割り貫かれていてその中を水が流れている。侵食によって自然にできたものなのだろうか。写真に収め先を急ぐ。先ほどのハンターに会う。間違って俺達を撃たないでよねー。この谷は（谷というより川といったほうが相応しい）全部ナメで構成されていると言って過言ではない。まるで舗装道路のようである。すべて分岐は本流を行く。やがてゴルジュが現れ、滝と言えば言えなくもない段差があり、いい雰囲気になってきたなあ、と心ときめくもすぐに終わってしまう。源流近くになるとワラジなどが捨ててあり、この谷も遡行者がいることがわかる。ヤブコギもなく林道にはい上がる。

さて手持ちの道路地図によれば、林道を歩くと車まで相当の距離になるので、ここはなんとかショートカットしたい。道路地図の上でコンパスを振る姿を他の人に見られたら叱られそうだ。だって俺達この山を甘く見てんだもん。だれか文句あっか？

いくらなんでも道路地図では迷うのは当然。方向は間違いないと思うが、自分の居る位置に自信がもてない。あっちじゃない、こっちじゃないと言いつつ、でも確実に微かな踏み跡を拾いながら無事キンダン川中流部に降り立ち、車まで戻った。

ルートグレード（0級の下）

時間もあることだし滅多に来ない所なので、がめつく登ることにする（いつものことだろうと言う声が聞こえてきそうだが）。先月に続いて山のハシゴだ。伊予ヶ岳に登ってみることにした。房総で岳という名の付く山はこの山だけだそう。さらに天空を突く岩峰のピークで、別名安房妙義と言われているそうである。これは登るほかないだろう。登山口まで車で移動する

こと約1時間位で着いた。

神社と小学校の間からハイキングコースを行く。なんと福島ナンバーの車があり、登りに来ているようだった。そんなに有名な山なんだろうか。期待に胸も膨らむ。頂上で岩登りを楽しもうとザイルも持ってきた。整備されているわりには、やけに滑りやすい道を一登りで着いた頂上は、狭くてなかなかアルペン的であるが、悲しいかな標高は337mしかない。景色は抜群で海が良く見えた。さて、岩登りだが、岩質は砂岩のようでかなり脆い。残置ハーケンもあるが、登る意欲は沸いて来ず下ることにした。でも、この近くのクライマーにとっては貴重なゲレンデかも知れない。日本全国になんとか富士という名前はゴマンとあるが、納得できるものばかりではない。こここの別名は安房妙義か！ウヘン！、100歩譲っても納得いかないがああいいか、許そう。下山途中、地元の話し好きなおじさんと会ったりしながら20分で車着。

房総=海というイメージがあるが、確かに高い山はないものの、けっこう山深く感じた。機会があったら又道路地図とコンパス持って行こうかな。

コースタイムは取っていたのだが、紛失しました。

グレード（＊別れ話の出ているアベック向きの上級）

（本図 記）

\*話がこじれた時頂上から突き落とされるから。石も飛んでくることが予想されるので、ヘルメットは必携。



キンダン川のナメにて..吉田

# 八ヶ岳大同心稜

1999. 12. 23

パーティ L 本岡一統、生井一男、吉田仁、渡辺聰子

19日の富士山での雪訓の帰りに、23日は八ヶ岳でアイゼントレ、その後で氷瀑に辿り着こう！という事になりました。アイゼントレなので登山道を歩くんだとすっかり思いこんでいた私は21日の集会に八ヶ岳のハイキング地図を持っていったのです。

『どこのルートを通ってどこにいく予定ですか？』とたずねると、

『大同心稜から硫黄岳。』とのお言葉です。地図上の赤線にそんなところはありません。『どこですか？のってないですよ。』と言うと

『それには書いてないよ、バリエーションルートだもん。大同心を巻くようにしてトラバースルートがあるからそこを行きます。』と説明されます。

ぱりえーしょん？！アイゼン歩行の練習だって言ってたぢゃあないですかぁ・・・。

前日、土浦を出発し美濃戸山荘の駐車場で睡眠。朝は6時半に起床し、準備をして出発です。赤岳鉱泉まではアイゼン無しでの歩きです。滑らないように注意しつつ、氷が張っている沢を見ながら快適に歩いていると、

『あれが大同心で隣が小同心、間の下の方に見えるのが大同心の大滝だよ。』  
と本岡さんに教えてもらいました。赤岳鉱泉でアイゼン

を装着し、いよいよ大同心稜です。大同心沢に進路をとり、急登をえっちらおっちら登っていきます。3級マイナスはあるうかという急登でした。途中で小休止のときにザックからペットボトルを取り出すと、なかに入っているお茶がみるみるうちに凍っていきます。わたしにとって初めての冬山なのでちょっとしたことでも大騒ぎです。気温はかなり低いようですが、さほど寒さを感じなかったのは風がほとんど無かったからでしょうか。なんとか大同心岩峰の下まで辿り着き、いよいよトラバースです。雪の付きが悪かったらロープ出すからと言って本岡さんが先頭を行きます。本岡さんががつけてくれた踏み跡を辿って慎重に進みます。リングボルトやシューリングが残置してありました。なんとかテラスにたどりつき一安心。目も差していたのでここでゴーグルが登場します。進行方向を見るとなんと岩ではありませんか！本岡さんがお助け紐を出してくれました。しかし、富士山でちょっと練習したからでしょう、紐にぶら下がること無くなんとか越えることが出来ました。さあもう少して稜線です。トップを行かせてもらい、膝までの雪をズボズボと歩いてみるとどどーんと富士山、奥に金峰をはじめとする秩父の山々が現れました。南の甲斐駒、仙丈、北岳も北ア



硫黄岳頂上にて…渡辺

ルブスの山々も見えます。天気は快晴、稜線上でもさほど風も強くなく快適そのものでした。生まれて初めてみると“えびのしっぽ”それも大きなものがあちらこちらにできていて、大感激です。昼食をとった後、硫黄岳まで稜線をがにがにと歩きます。硫黄岳山頂からは一月前にいった荒船山が間近に見えました。ここまでくれば勝ったも同然と思っていたら、それを見すかしたかのように『我々の山行はまだ終わっていないからね。これからアイスクライミングだよ。』と本岡さんの声が飛びます。ジョウゴ沢までのやたらに遠回りのアプローチです。あとは一般道をアイゼンをひっかけないように注意しつつやはりガニガニと下りました。ジョウゴ沢出合から沢沿いに進みF1の滝に到着です。赤岳鉱泉にテンパっている（らしい）人たちが練習をしていました。ここでバイルのふりかた、アイゼンの蹴り込み方、スクリューハーケンの打ち方を教わり、早速やってみますが泣けちゃうくらい下手です。マスターする前に時間切れとなってしまいました。赤岳鉱

泉に戻りアイゼンをはずした後、ヘッドライトを準備して車へ急ぎます。なんとかライトを点けずに車まで戻ってくる事が出来ました。

小淵沢のインター近くの温泉にはいり、途中のSAでほうとうを食べ出発したのが7時30分でしたが、なぜか中央道も首都高速もがらがらで10時には土浦に到着する事が出来ました。

さあ、次はいよいよ正月合宿です。この時点からすでに心はお正月でわくわくしていました。きっとそれがいけなかったのでしょう。まさかあんなことになるとは・・・。

美濃戸(7:23) — 赤岳鉱泉(9:03~9:24) — 横岳稜線(12:14~12:42) — 硫黄岳(13:31) — 赤岳鉱泉(14:26) — 美濃戸(16:42)

(渡辺 記)



# 《友好山岳団体の月報、会報、その他》

## ありがとうございました

### ■月報■

◎Rohman NO. 174. 1999. 10. B5 60P 浦和浪漫山岳会

川内・仙見川静川、下田・光来出沢、谷川・ヒツゴ一沢、南会津・塩ノ岐沢~丸山~三ノ沢、黒又川・キンカ沢~上ノ大沢~第2ダム~黒石沢左俣~松岳~第2ダム~出合沢~明神山~大禿 沢左岸尾根下降、秋の集中平ヶ岳・6 パーティに別れての集中ほか

◎Rohman NO. 175. 1999. 11. 12 B5 28P 浦和浪漫山岳会

東北・虎毛山・湯の又沢~高松岳~赤湯又沢左俣下降、南会津・台倉高山・舟岐川黒沢深沢~台倉高山~トヤス沢下降、東北・後生掛温泉、日光・小田ケ原~西ノ湯~千手ケ浜、富士雪上ほか

◎わらじ NO. 523 1999. 10 B5 16P わらじの仲間

和賀・堀内マンダノ沢~生保内川、甲斐駒ヶ岳・赤石沢奥壁中央稜、黒部川、平ガ岳大白沢、白山・境川ボージョ谷~加須良川下降、チベット・チムカソリ、鳥甲山白グラ1ルンゼほか

◎わらじ NO. 524 1999. 11 B5 14P わらじの仲間

荒沢岳・中ノ岐川滝沢、栗駒山・産女川、黒部別山大ヘツリ中央ルンゼ、焼石岳・尻前川本流~夏油温泉、瑞牆山フリークライミングほか

◎わらじ NO. 525 1999. 12 B5 12P わらじの仲間

冬の利根横断から越後沢尾根、飯豊・玉川松山沢本流ほか

◎逍遙 NO. 101 1999. 10 B5 16P 逍遙溪穀会

谷川・東黒沢~ナルミズ沢、丹沢・玄倉川小川谷、大菩薩・小室川谷、焼石岳・尻前沢、谷川・万太郎谷井戸小屋沢、奥多摩・川乗谷逆川ほか

◎逍遙 NO. 102 1999. 11 B5 22P 逍遙溪穀会

奥日光・柳沢川右俣~左俣、鬼怒川湯沢、魚野川茂倉谷、裏岩手安栖沢、葛根田川、和賀・羽後朝日岳堀内沢マンダノ沢下天狗沢、生保内川、志戸前川荒沢、那須・白水沢ほか

◎逍遙 NO. 103 1999. 12 B5 10P 逍遙溪穀会

南会津・男女川、丹沢・神ノ川大岩沢ほか

◎Next! No. 46 1999. 10 B5 32P 山岳渓流釣り集団むげん

川内・砥沢川~大川、丹波川本流、上越・釜川千倉沢ほか

◎Next! No. 47 1999. 11 B5 14P 山岳渓流釣り集団むげん

イワナのなぞ、ほか

◎Next! No. 48 1999. 12 B5 22P 山岳渓流釣り集団むげん

飯豊・実川前川本流、日和田山岩トレほか

◎とまのかぜ No. 83 1999. 10 B5 48P 童人とまの風

平ガ岳・大白沢アサユウ沢、谷川・湯松曾川本流、赤倉沢、丹沢・烏屋鐘沢、飯豊・内ノ倉川七滝沢、鹿ノ俣川、胎内川黒石沢、楳ノ木鴨沢、谷川・マチガ沢東南稜、越後・水無川東不動沢、モチガハナ沢、滝ノ沢右俣、奥多摩・海沢、谷川・東ゼン、魚野川荒沢、奥多摩・神戸川トグレ沢左俣、荒沢山北カドナミ沢ほか

◎とまのかぜ No. 84 1999. 11 B5 59P 童人とまの風

谷川・赤谷川笹穴沢、南会津・三岩岳~袖沢ミチギノ沢、御神楽岳・御神楽沢、栗子・叶堂沢、荒沢山カドナミ尾根、谷川・大源太川北沢本谷、安達良山集中・12本の沢を登る、奥鬼怒・黒沢、武尊・川場谷、阿武隈川南沢、楳ノ木沢堂沢、日和田ゲレンデほか

◎とまのかぜ No. 85 1999. 12 B5 17P 童人とまの風

南会津・御神楽沢、湯河原・幕岩、妙義・中木沢小山沢、丹沢・遭対訓練、ボッカ訓練ほか

◎北岳バットレス落石事故の報告、1999. 11 B5 21P 童人とまの風

8月22日、発生した落石事故の報告書

◎山紫水明 No. 54 1999. 10 B5 16P 山旅の会

奥多摩・水根沢谷、十二ヶ岳岩トレ、北岳バットレス4尾根ほか

◎山紫水明 No. 55 1999. 11. B5 10P 山旅の会

- 奥多摩・熊倉山西沢東沢、桂川右岸研究・月屋根沢ほか  
◎山紫水明 No. 56 1999. 12 B5 12P 山旅の会  
三ツ峠、丹沢・セドの沢右俣ほか  
◎すずらん通信 No. 223 1999. 10 B5 25P 鈴蘭山の会  
秋の集中巻機山・5パーティに別れて遡行、谷川・万太郎本谷、南ア・黒桂河内二の沢右俣、湯松曾川・  
錢入れ沢、朝日・八久和川中俣沢、谷川・一ノ倉沢凹状岩壁、南ア・扇沢、黄蓮谷右俣ほか  
◎すずらん通信 No. 224 1999. 11 B5 22P 鈴蘭山の会  
巻機山集中、葛根田川ブナの森調査、奥利根・小穂口沢本沢、赤岳・赤岳沢、栗子山・滑谷沢~枯松沢、奥秩  
父・東沢東のナメ沢、谷川・オジカ沢ほか  
◎すずらん通信 No. 225 1999. 12 B5 20P 鈴蘭山の会  
越後駒・佐梨川大ショーナ沢、立山山スキー、谷川・オジカ沢、ヒマラヤトレッキングほか  
◎渓游 No. 108 1999. 9 B5 18P 游渓会  
下田・笠掘川光来出沢、朝日・八久和川、北ア・金木戸川打込谷、苗場山、大峰・芦の瀬川本流、扇ノ山・上地  
川本谷、大山・甲川、大峰・上多古川大柄谷、台高・木屋川本谷ほか  
◎渓游 No. 109 1999. 10 B5 12P 游渓会  
四国・銅山川瀬場谷床鍋谷、長良川大日岳前谷川、戸隠・追悼山行、越美西ケ洞源流コセイ谷、大峰・池郷  
川正法寺谷、上信越・魚野川、鈴鹿・御幣川池ノ谷、大峰・弥山川、恵那山・一の沢ほか  
◎渓游 No. 110 1999. 12 B5 10P 游渓会  
大峰・東の川シオカラ谷、四国・老ノ川雪漠谷、南紀・和田川奥山谷、裏六甲・鎌倉峡、台高・宮川大和谷ほか

## 会報

- ◎遡行 No. 16 1999. 10 B5 122P 大阪わらじの会  
クラブからの寄贈ではなく、池上さんから個人的に送られてきたもの。朝日1本、越後1本、伊那1本、  
白山1本、鈴鹿5本、布引1本、鳥羽1本、台高1本、大峰3本、南紀3本、高野山2本、奥高野3本、多紀  
1本、帝釈1本、播州3本ほか  
◎年報とまのかぜ No. 6 1999. 9 B5 286P 童人とまの風  
無雪期の山・飯豊、五頭、会越、越後、谷川、奥利根、南会津など41本、北海道、東北8本、北南ア4本、関東、  
中部、以西25本、雪の山・越後、南会津、谷川19本、東北7本、八ヶ岳、北ア3本、関東4本ほか  
◎すずらん No. 20 1999. 10 B5 130P 鈴蘭山の会  
山スキーの記録8本、沢登りの記録20本、ほか  
◎年報わらじ No. 22 1999. 12 B5 210P わらじの仲間  
1998年冬合宿3本、春合宿5本、夏合宿6本、春集中9本、秋集中7本、その他の会山行5本、北海道、東北8本。  
飯豊5本、南会津、那須7本、会越、川内12本、越後11本、上信越18本、東京近郊12本、北ア8本、八ヶ岳、中ア、  
南ア4本、関西、九州11本、海外2本ほか  
◎登攀記録1997~1998年 A4 59P 秀峰登高会  
1997年の記録34本、1998年の記録28本ほか

以上閲覧したい方は本図まで

## 編集後記

編集を続けて早ウン十年。吹きすさぶ嵐の日もあった。日溜まりの暖かい穏やかな日も。今振り替えると遠い道のりを一人で歩いてきたような？。でも陰の色々な協力者のバックアップのお陰もあって今日まで歩いてきた気がします。

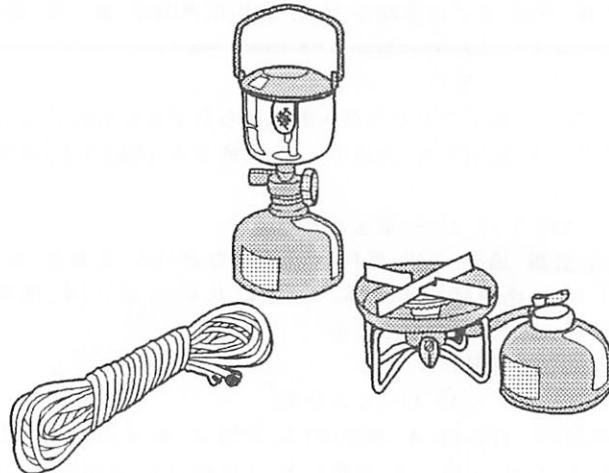
まだ会に入っていた頃、一人、谷川岳、妙義山、奥日光の山、奥多摩の山を不安と期待の胸を膨らませ登っていた頃を思い出します。何も分からず山への一途な思い一つだけで登った蒼い時代。それも年月を経ると色あせてきてしまって、現在はただ単に流してしまっている山行にもう一度あの蒼い時のような驚き、感動を取り戻すにはどうしたらいいのでしょうか？……？

編集していくもそういう感じがします。思い一つで始まった蒼い編集の時代から惰性（マンネリ）になりつつある昨今である。これからこれをどう解決するかが問題である。

読者の皆様、もしいい打開策がありましたら御投稿をお願いいたします。…と、言うよりそろそろ編集者を変えた方がもっとバージョンアップ出来るじゃないかな？。解任の時期なのかも……。

誰か立候補する人はいませんか？

(編集長)



---

季報[R&V] 第35号 発行1999年秋

発行者：本団一統

発行所：ACC-J茨城 〒306-0501 茨城県猿島郡猿島町逆井318  
生井一男

編集者：生井一男

印刷所：やまと印刷

---



岩壁、沢、冬山のクライミング集団